

国立国際美術館

2024 年 9 月 2 日

新規収蔵作品のお知らせ

ルイズ・ブルジョワ《カップル》とレオノール・アントゥネス《M.Y. との相違》ほか

国立国際美術館（大阪市北区中之島 4-2-55、館長・島敦彦）は 2023 年度にルイズ・ブルジョワ（1911 - 2010）の代表作の一つ《カップル》と、レオノール・アントゥネス（1972 - ）の彫刻インスタレーション《M.Y. との相違》《シャルロット #7》《道子 #6》を収蔵いたしました。

ルイズ・ブルジョワは、20 世紀を代表する最も重要な女性アーティストの一人と言えるでしょう。その長いキャリアを通じて初期の絵画、版画から彫刻、インスタレーションと表現形態は幅広くありながらも、自身の経験や記憶に着想を得た怒り、孤独、恐怖といった固有のテーマの探求を続けました。《カップル》は 90 年代後半から手がけられた布を用いたソフト・スカルプチャーの代表作の一点。身体は初期の絵画から続くモチーフの一つですが、欲望やジェンダーという問題が本作でも見ることができます。国内では 1997 年に初個展が横浜美術館で開催され、今秋も森美術館での個展開催予定がありますが、ブルジョワの作品が国公立美術館に所蔵されるのは初です。

ポルトガル出身でベルリンを拠点に国際的に活動するレオノール・アントゥネスの《M.Y. との相違》は《シャルロット #7》とともに国際芸術祭「あいち 2022」に出品された作品です。アントゥネスが 2021 年から開始した「主婦とその領分」のシリーズ作の一部でもある本作は、山脇道子とシャルロット・ペリアンという日欧を往来した 2 人の女性デザイナーがアイデアの源泉です。新作《道子 #6》も加えて展開される作品群では、2 人の女性デザイナーによるテキスタイルや調度品のデザインを解体し異なる素材により再構成することで、当時の女性作家たちの文化を超えた受容や自身の工芸的文脈を織り込みながら、彫刻インスタレーションとして空間に展示構成されます。

ジェンダー・バランスの見直しに積極的に取り組む当館が、この優れた女性作家 2 名による作品群をコレクションに加えることは、大きな意義があると言えます。

レオノール・アントゥネスの作品は 2024 年 11 月開幕の「コレクション 1 彼女の肖像」展（11 月 2 日—2025 年 1 月 26 日）に展示予定です。またルイズ・ブルジョワの作品は前年度開催の「コレクション 2 身体——身体」（4 月 9 日 休止）に展示されましたが、今後の展示予定が決まり次第、お知らせいたします。

なお 2023 年度には上記作品を含め合計 42 点の作品を購入・寄贈により新たに収蔵しました。順次コレクション展等を通じてご紹介いたします。

広報に関するお問い合わせ先

国立国際美術館 広報担当 藤村 南帆

E-mail: kouhou@nmao.go.jp TEL: 06-6447-4671(直通) FAX: 06-6447-4699

1. ルイーズ・ブルジョワ 《カップル》 1996 年



ルイーズ・ブルジョワ

《カップル》 1996 年

布、詰め物、ステンレススチール、木、ガラス

38.0 × 68.5 × 70.2 cm

台：178.2 × 112.0 × 97.0 cm

撮影：福永一夫

© The Easton Foundation / VAGA at ARS, NY / JASPAR, Tokyo 2024 G3618

《カップル》(1996 年) について

ルイーズ・ブルジョワは 1996 年から、布を縫い合わせ詰め物をしたソフトスカルプチャー作品の制作を始めました。ソフトスカルプチャー作品のなかでも最初期につくられた本作品は、頭部と脚を欠いた二体の上半身が「カップル」というタイトルよろしく、互いにぎゅっと抱き締め合っています。不穏な雰囲気漂わせながらも離れることのできないその様子に、愛情、欲望、孤独、暴力、怒り、嫉妬など、人との間に生じる一筋縄ではいかない揺れ動く感情や関係性を読み取ることができます。ブルジョワは、母親への思慕、父親への愛憎、幼い頃の家庭環境で負ったトラウマを制作の動機としていました。作家本人や家族の古着を素材に使い、針仕事を生業としていた母の記憶に通じる手縫い作業を経て作られた本作もまた、作者の個人的な記憶と密接に関連しているのです。

ルイーズ・ブルジョワ (1911 - 2010)

タペストリーの修復と販売をおこなう両親のもとパリに生まれたブルジョワは、幼い頃から家業を手伝い、美術学校で学びました。1938 年結婚を機にニューヨークへ移住。1957 年にはアメリカ国籍を取得しています。巨大な蜘蛛の彫刻でよく知られていますが、その作品は絵画、版画、彫刻、ドローイング、インスタレーションと幅広く展開しました。1982 年にニューヨーク近代美術館 (MoMA) で女性の彫刻家として初の回顧展を開催するなど、男性中心だった美術界で道を切り拓いてきた美術家です。

2. レオノール・アントゥネス 《M.Y. との相違》2021 年、《シャルロット #7》2021 年
《道子 #6》2023 年



レオノール・アントゥネス 《主婦とその領分》2021-2022 年

[参考画像] 国際芸術祭「あいち 2022」展示風景

© 国際芸術祭「あいち」組織委員会

撮影：ToLoLo studio



レオノール・アントゥネス 《道子 #6》2023 年

真鍮

サイズ可変

Photo by Nick Ash

《M.Y. との相違》(2021 年)、《シャルロット #7》(2021 年)《道子 #6》(2023 年) について

20 世紀なかばに活躍し、日本とヨーロッパを往来した 2 人の女性のデザイナー、山脇道子とシャルロット・ペリアンの仕事から着想された本作品群は、作家レオノール・アントゥネスが 2021 年から始めた「主婦とその領分」というシリーズ作品の一部です。異国の地でも創造性を発揮した女性作家たちに敬意を表して、アントゥネスは、室内の調度品として考案された彼女たちの仕事を再解釈し、陶や真鍮の素材に置き換え、空間に広がる大きなインスタレーションとして提示します。

*** 山脇道子 (1910 - 2000)、シャルロット・ペリアン (1903 - 1999) について**

東京で生まれた山脇道子は、夫である建築家・写真家の山脇巖に伴い、1930 年にドイツに渡ります。美術教育を受けたことがない一介の主婦だった道子は、夫とともに芸術学校バウハウスに入学。織物科に進級し、熱心に学びました。帰国後は、日本でバウハウスの教育理念を伝え、テキスタイル・デザイナーとしても活躍しました。フランスのデザイナー、シャルロット・ペリアンは、建築家ル・コルビュジエのスタジオで同僚だった建築家・坂倉準三の招きで、1940 年日本の輸出工芸品のアドバイザーとして来日します。戦争の激化により帰国が難しくなるなか、日本では竹や陶を使用した家具のデザインを発表し注目を集めました。

レオノール・アントゥネス (1972 -)

レオノール・アントゥネスは、リスボンに生まれ、現在はベルリンを拠点に活動する作家です。20 世紀に、男性中心の制作現場で活躍した女性の建築家やデザイナーなどの先人たちの活動に触発され、彼女らの仕事を丁寧に調べ、再解釈する作品を発表してきました。麻や竹、木材、皮革、真鍮といった素材を、結ぶ・編む・縫うなどの工芸的な職人技によってつなぎあわせた、抽象的な彫刻やインスタレーションの作品によって知られています。

近年、サンフランシスコ近代美術館 (2016 年) やフルーツマーケット・ギャラリー (2023 年) をはじめ世界各地における個展開催や、第 58 回ヴェネチア・ビエンナーレ、ポルトガル館代表 (2019 年)、国際芸術祭「あいち 2022」、シャルジャ・ビエンナーレ (2015 年) など大規模な海外展への参加が続いています。